
僕等は井蛹川にて～移心編～

魔狗羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕等は井蛹川にて〜移心編〜

【Nコード】

N2299B

【作者名】

魔狗羽

【あらすじ】

割心斬かつしんざんは、それを取り巻く人間の全てを変えた。だが いやだからこそ、そこからストーリーは始まる。狂気に覚醒してしまった敬子、失踪した友達に混乱する仲間達、割心斬に特別な思いがある二人の刑事。そして最後には ！？

第1話：始まりは夢を以って（前書き）

こんにちはわ、魔狗羽です。初めてのホラーですが、よろしくお願いします。

第1話：始まりは夢を以って

遂に　この時がやってきた。
敬子は左手に握り締めた包丁を見つめて、額から冷や汗を流した。

「じゃあなケイ！」

「また明日な俊人！」

今日も部活が終わり、友達と別れて俺、五神俊人^{いつがみしゅんと}は帰路についた。
いつものように、部活後の肩に掛けるテニスラケットの重みには苦しまされるが、もうすぐ家だ。それに今日は俺の誕生日。夕食後のケーキを想像しながら学校から15分かけて帰宅した。

「ただいまあーっ！」

ドアを開けると、恥ずかしいからやめてくれと言っても結局毎年仕掛けられるクラッカーの破裂音に迎えられる　筈だった。

しかし、クラッカーの音はおるか、何の物音もしなかった。電気さえ付いていない。静寂と暗闇が我が家を包み込んでいた。誰も居ないのか？車は駐車場に停まっていたから母さんは外出していない筈。弟は友達の家遊びにいつてるからいいとして　母さんは？まあいいや、夜には帰ってくるだろう、と思って二階に上がり、自分の部屋のドアを開けた。母さんが、いた。左手に包丁を握り締めて。

ザクッ、ザクッ、ザクッ

早く　早く埋めなければ。

深夜の樹海は暗闇に包まれている。本当に　ライトがなければ何

も出来ない。私はスコップを持ち直す。もう20分以上も掘り続けている。もう正直疲れた。だが、やらなければ。

私は息子の冷たい身体を抱え、複雑な気持ちになった。最後までちゃんと顔を見てお別れしたかった。だが本当に辺りは真っ暗で何も見えない。せめて感触だけでも、と思い、刺した傷口と頭に手をやって、最後に手を握った。別に私は 好きでこんなことをした訳では無い。 俊人。

だが私の中ではもう一つの気持ちが始めていた。私がそれを自覚するようになるのはもう少し後のことだが。

「さて どういうつもりなのかなあ、あの奥様は」

「?どうかしました?城山刑事。どこか不審な点でも?」

翌日、五神敬子いつがみけいこによつて息子の失踪が通報された。

「いや 普通ならもっと取り乱してもいい筈なのに 妙に黙ってましたよねえ」

城山刑事は足と腕を組む。

「はあ 確かにそうかもしれないですね」

「普通じゃないのは 本人に何か理由があるか 起こってることとが普通じゃないか、だ」

城山の眼がざらり、と光った。

「はっはっは またそれですか しかし城山刑事、この事件は」

「

「そう。『五神家は一人っ子だ。兄弟は居ない』。ですがたまに話がねじれて信仰されてたりしますからねえ おもしろそうですねえ、私も独自に動いてみます」

「全く 城山刑事も物好きですねえ。今時ある筈無いじゃありませんか 割心斬かつしんざんなんて」

城山は椅子から立ち上がると、同僚の方を振り向く。

「まあ、ただの暇潰しですよ。最近割心斬は全然見ませんからねえ。
。多分すぐ帰ってきますから　ここ、よろしくお願いします
よう?。」

「お　おい聞いたかよ　俊が　」
高丸中学校。朝のホームルーム前の教室には、これ以上ないくらい
暗い雰囲気漂っていた。

「ああ　。意味わかんねえよ　」
その中でも俊人といつも行動を共にしていた鳥宮紅と小希川啓太郎
吉野陸也に利根元竹昭は絶望の真っ只中にいた。
よしのりくや
とねもとたけあき

「居なくなっただって　どういふことなんだよ　」
紅は身体中から力が抜け落ちているようだ。陸也も目に涙を浮かべ
ている。皆、それ程に俊人と仲がよかったのだ。

「見つかるのかなあ　俊　」
竹昭がそう呟いた。すると啓太郎がバンツ！と机を叩いた。

「見つかるのを待つんじゃないくて！俺等が探し出すんだ！俊を！」
ひそひそ声が絶えなかった教室が、その叫び声にシーン、となった。

高丸町、高丸銀行。

「おらあ！金だせえ！金え！」
目出し帽を被った四人の男達に強盗に遭っていた。彼等は強盗の常
習だった。

結局、その日高丸銀行はおよそ200万円を奪われた。

第1話：始まりは夢を以って（後書き）

人は、何か目的を持つと積極的に動く。

第二話：包み、溺れ、弾ける

「3人目！メツタ刺し殺人！連続殺人か？」

朝刊にはこんな見出しが躍っている。全く、いくらスポーツ新聞だからって、こんな何かのイベントのように掲げなくてもと思う。まあ、犯人の私としては、微妙な心境だけど。

そう。今までの三人、殺したのは私。なぜこんなことをしたんだろう、と思う。しかし本能的にやってきたこれらのことについて、自分でも少しずつわかってきた。

息子を　俊人を殺した時の感触がきえないのだ。そしてそれに快感を感じ取ってしまった私。

私は、死ぬまで殺人行為を止められないのだろうか。絶望が私を支配していたが、やがて快感が身体からこみ上げてくる。やはり、止められない。

「俊は、昨日はいつもみたいに俺と一緒に帰ったんだよ　だから居なくなっただんならそれから何かあったんだと思う」

放課後、四人は皆の溜まり場と化している井桶川いさなぎがわの大きな橋の下の川原に来ていた。

「つつかその日俊誕生日だったじゃん。なんかばあちゃん家行ってる　とか　じゃねえの　？」

言っている内に自信が無くなったのか、竹昭の声は次第にしぼんでいった。

「バツカ、そしたら失踪の届けなんて親が出さねえよ」
啓太郎が即座に否定するが、声はしぼんでしまう。希望を潰された

感じがしたのだ。

「確かに落ち着いていられないのはわかる　　ってか僕だっけそうだよ。でも、僕等だけで捜し出すのは無理があるんじゃないか警察だっけ捜索は進んで　　」

「うるせえよお前ふざけんなよこのままでもいいってのか！？ああ！？」

「け　　ケイ落ち着いて　　」

紅の言葉に啓太郎がキレて、それを竹昭が止めようとする。が、啓太郎は止まらない。

「ああ！？アキ黙れよじゃあお前俊の居場所知ってんのかよバーカ！」

皆、混乱していた。当然だ。中学二年生に友達の失踪は　　辛過ぎる。　　が。

「　　陸也？」

陸也一人、さつきからずっとだまっている。

「陸也？どうかしたのか　　？」

気のせいかな陸也は震えている。

「あ　　あのさ　　」

「ん？陸也どうかしたのか？」

啓太郎達も不思議に思っ陸也の方を向く。

「　　じ　　実は　　さ　　」

「な　　何だよなんか知ってんのか？」

皆、身乗り出す。

「じ　　実は、言っただんだよ　　俊が

消えるかも

消

されるかも　　って　　」

陸也は震え、冷や汗を流しながら言った。

「ああ

懐かしいねえ

割心斬かあ

」

「そうでしたよねえ、私達が最後に関わった割心斬は 何年前で
したっけ？」

そしてハハハハ、という笑い声。

「いやあ、それにしても。本当にごぶさたぶりですねえ、あみわた網綿刑事」
散らかった、狭い畳の部屋。小さなちゃぶ台には缶ビールが二つ。

「んで？わざわざぬるい缶ビールを出されることがわかって、俺
ん家に何の用だ？まさか辞めさせられた俺に捜査協力しろって訳じ
やねえだろうな？」

顔を赤くしながら、＼シャツ一枚に短パン姿の綿網刑事が鋭い眼付
きで聞いた。

「はっはっは まさか、とか言っておきながらやる気満々なのは
見え見えですよ？」

「ふん ったりめえだろ。敵討ちだよ。一生分の」
缶ビールを煽る網綿。ヤケになっているのだろうか。

「兄弟または姉妹の上の方が、十七歳に『大人へ成長する証』とし
て子供との境をくつきりつける為に、下の方を殺す儀式 割心斬。
儀式をする方は親からこっさり教えられ、嫌がっても半強制的に殺
させる。本来はそれが高丸村に伝わる正しい言い伝えなんですがね
え」

「もし城山の言うその事件を無理やり割心斬だと見ると、親がなん
らかのけじめをつける為にやった又は」

「やらされた、ですか」

城山がにやり、と笑った。

血が騒ぐ。今度は四人目か。

私は夕暮れかった町を、ただひたすら獲物を求めて彷徨さまよっていた。
バッグに入れてある包丁の感触を、今一度確かめる。
胸が高鳴る。

確かにあの割心斬は私を変えた。そしてもう後戻りできないところまで来てしまっている。私をこんなにしてしまった割心斬。でも、引き換えに快感を教えてくれた割心斬。
胸が高鳴る。

第二話：包み、溺れ、弾ける（後書き）

騒音は、その人にとっては大切な音の集まり。

第3話：崩れる調和

「わ 私はただ真摯に割心斬をさせただけ！逮捕される筋合いなんてないわ！」

高丸町のとある一軒家。四年前の記憶が鮮やかな映像となつて、今もくつきり残っている。

「こ 来ないで 来ないで」

母親の両腕に絡められている十七歳の娘。怯えている。が、たった一人の刑事に対して怯えているのか、母親に対して怯えているのかは、当事者でない刑事には想像出来なかった。

「来ないでえええ！」

母親は狂乱しながら包丁をぶんぶん振り回す。そして。

「お お母さ きゃあああああ！」

包丁が娘の頭に深く刺さった。故意か偶然かは、刑事にはわからなかった。その後、刑事が母親に威嚇のつもりで撃った銃弾が腹に命中してしまい、親子もろとも息絶えたからである。

その場に残されたのは、網綿一人だった。

その後、警察から無意味な発砲をした、と見られ、普段から署内で素行も粗かった為、これ幸いと警察から追い出されてしまったのだ。

「な どういうことだよ！それ！」

陸也の衝撃的な発言に、紅は陸也の服を掴んで怒鳴った。

「い いや それが俺もよくわからないんだ。一週間くらい前にいきなりふらつとやって来て ただ『もうすぐ俺は消える 消されるかもしれないんだ』って 。それだけ言っただけで帰っちゃったんだ。何のことかわかんなかったし、ありえないと思って

たから、俺は背中越しに『何言ってるんだよタコ』とだけ言っただ

「そんなことを俊が!? 何で 何で俺達に言ってくれなかったんだ !?」

啓太郎は驚愕の表情を浮かべた。

「僕等にもその後言うつもりだったんじゃないかな ? でも陸也に相手にされなかったから皆も信じてくれないんじゃないかって思っ
たんじゃないか ? あ、いや別に陸也を責めてる訳じゃなく」
紅は一通り自分の考えを言ったあと、陸也がずっと黙ってたのは自分に負い目があるって思ってたからじゃないのか、と思い、慌てて付け足した。

「でもそれって俊は自分が消えるって知ってたってことだよな ? 本人に心当たりがあつたんじゃない」

竹昭が消え入るような声で言う。

「じゃあ とりあえず俊ん家いってみるか !」
立ち上がる。ここから、四人は動き出す。

また新聞に私の事件が載っていた。これを見ることでも私は満足出来る。

私が一人でくすつと笑うと、傍に置いてあつた包丁がざらり、と光った。

「おい、そろそろここもヤバくねえか? 警察も張ってる見てえだし」

「そう だな。おいターナー、例の盗聴器は揃ったか?」

「ああとつくだ。これならどんな時でも住人を二十四時間監視出来

る」

「じゃあぼちぼち行きますか　　ここの住人は後で始末するとして

」

「そうだな。皆、持ち物と指紋だけは残すなよ」

ある民家の中で、強盗グループの四人も、動き出した。

「とりあえず五神家に向かいましょうか　　。あの奥様からは、ろくな情報を頂いておりませんし　　」
「そうだな　　。まあ問い詰めたらもうちよつとは貰えるだろうな」
「それから、五神俊人さんのお友達にもお話を伺うことにしましょう」

二人は五神家へと足を向けた。二人も、動き出す。

カア、カア、カア

夕日が眩しい。

「ここからなら後15分くらいで着くよ」

紅達四人は、啓太郎と俊人が最後に別れた道まで来ていた。

「ここで、俺と俊が別れたんだ　　最後に　　」

『最後に』のところで、啓太郎は俯いてしまった。

「　　そうか。その時は、俊はどうだった？　　なんかおかしかったりはしてた？」

「ん　　普通だった　　。いや、あの日はあいつの誕生日だったから逆にテンション高かったと思う　　」

普段では考えられないような歯切れの悪さで啓太郎は言った。陸也のように自分に非があったんじゃないか、と思っているようだった。

「う　　ん　　そっか　　」

四人は自然と黙ってしまい、重い空気のなか、段々と五神家へと向かっていった。その時

「おや、小希川さん達じゃありませんか。偶然ですねえ」

目の前に、二人の、長身の男と酒飲みそうな男が現れた。
城山
と網綿だ。

第3話：崩れる調和（後書き）

何かが動けば、それまでの状態は壊れる。

第4話：始まる前には夢を創って

「誰ですか？貴方達」

紅が警戒しながら言った。

「おっと、失礼しました鳥宮さん。私は城山。警察ですよ。」
なぜかおかしそうにはっはっはっ、と笑った。

「警察！？なんで警察が俺達の名前を　！？」

皆、驚いていた。まあ、当然だろう。

「それで、あの　貴方は　？」

「　網綿だ　」

ぎろり、と睨まれて竹昭はすくみあがった。

「貴方達もこれから五神家に行くんでしょう？これもなにかの縁です　我々とのんびりお話でもしながら行きませんか？」

完全に城山のペースで、四人は何も言えなかった。

「まあそれで　あくまでも推測なんで聞き流してもらっても構わないんですがねえ　。皆さん、割心斬ってご存知ですかあ　？」

「かつ　しん　ざん　？」

昨日

グサッ！

「あ　う　」

どさっとその場に崩れ落ちる主婦。

「おいサッチモ、こっちは終わったぞ」

「こっちもだ。あとは夫ともう一人のガキ　兄の方が」

「そいつら殺んのはターナー達だったな。どうなった？もう終わったのか？」

強盗グループの四人が今まで隠れ家としていた一軒家。彼等は決ま

ったアジトを持たない代わりに、一般の民家に押し入り、住民を脅迫しながら何日か住む。そして足が付きそうになったら口封じに住民を殺してそこを引き揚げる。そして次の場所を探すのだ。

そして今、口封じの真つ最中のこの家の中は、地獄絵図だった。

「夫の方はもう済んだ。だが」

「いつもこの時間には塾から帰ってきてる筈の兄がいねえ」

「　　ったく　どうなってやがんだ。ターナー、ちよつと家の周り見て来い。他をやっちまった以上、ここは全て終わりにしなきゃな」
「　　わかった」

全てが始まる前に、仕掛けは作られ始めていた。

「へえ　そんな儀式が　。それでこの失踪がそれだつて」

「はい。あくまでも推測ですが」

にこにこしながら城山が言う。

「それじゃあ　俊はその犠牲に」

「ふざけんな！そんなことがあるかよ！俊がそんなよくわかんない儀式の為に消えるなんて」

「ケイ落ち着けて」

「まあまあ皆さん落ち着いて　ほら、五神家も見えてきたことで
すし　少し冷静になってみてはいかがですかあ？」

相変わらずにこにこしながら城山が言う。

「や　やっぱり次は僕だ　僕は　殺される」

高丸中学校の隣の中学、草上中学校。そこでは一人の天才が死に怯えていた。

「おい、越水^{こしみず}。何そんなところでうずくまってんだよ。　いくら

あんなことがあつたからって」

「小島 君なら 君なら 信じてくれるか？」

「ん？どうしたんだよ？」

「僕は」

ピンポン

『はい、五神ですが』

四人はチャームを押してから、俊人の母 敬子の声を聞くまでが異常に長く感じられた。城山は相変わらずにここにこしていて、網綿も相変わらず鋭い目をしていた。

「あの 俺等、俊の友達なんですけど」

一瞬の沈黙。

『ああ、はいはいどうぞ上がってくださいな』

「あと」

「私達、警察も偶然、いるんですよ。もしよければ一緒に上がらせていただきたいのですが。はっはっはっはっ」

『そうですか。どうぞ、ご一緒にお上がり下さい』

第4話：始まる前には夢を創って（後書き）

未来と過去を繋ぐ物語は、真実を捻じ曲げる。

第5話：絡み合っていた謎

「 進んでるかな 事情聴取 」

四人は俊人の部屋に通され、お菓子を出されて、城山達の行う事情聴取が終わるまではとりあえず動かないことにした。

「さあ でもとりあえずはあの城山と網綿って刑事に任せてみようよ」

「 う ん 」

「ところでさあ、俊ん家って 父親いなかったっけ？」

「 さあ。あんまり家族のこととか話したことないし 」

「ふーん 」

その時だった――

「キヤアアア！」

リビングから敬子の凄まじい悲鳴が聞こえてきた。

「なんだ！」

リビングへと急ぐ四人。そして四人が見たのは、立ち尽くす城山達と、ナイフで背中を刺されて俯せに倒れている敬子だった。

「 な これは ！？ 」

「 俊人君ですよ 」

恐怖で目を見開いている城山。

「 は！？俊人君ですよって 」

「 いきなり玄関の方から俊人君が現れて 一瞬の内に母親を刺して、逃げていきました なんと 不覚です 」

「 なんだって！？ 」

俊人が敬子を刺し いやそれよりも 俊人は生きていた！

「それで、敬子さんは 助かるんですか？」

「 いや、もうこの出血じゃ無理だろうな 」

網綿が顔をしかめて言った。

ああ　　なんでこの私が殺した筈の俊人が　　。　　だんだん　　意識が薄れていく　　。死ぬのは嫌だけど　　もう人を殺せなくなるのは　　もつと嫌　　。

草上中学校の夕暮れ時の教室。ちょうど部活を終えたところだ。

「　　確かに。でもな、一日に一気に３人だぜ？いくらなんでも偶然だつて！大体その規則に従うことに何の意味がある？越水、ちよつと神経が敏感になつてただけだよ」

「そんな　　」

「ほら、これから塾だろ？一緒に行こうぜ？」

「　　」

その日の夜１０時過ぎ、塾から帰る途中で越水辰輝こしみずたつきが何者かによつて刺される事件が発生した。越水は出血多量で死亡。警察は前日に起きた、連続殺人との関連を調べている。

さらにそれから２時間後、一時は諦めかけていたが、五神俊人に刺された五神敬子は一命を取り留めた。意識が戻つてからは、ずっと譫言のように

「俊人、俊人　　」

と繰り返しているそうだ。

そして、五神俊人はまた姿をくらまし、まだ見つからない。

「なんか　よくわかんないことになっちゃったなあ」

次の日の放課後、いつものように四人は井蛹川に来ていた。

「　ああ　」

「こんな狭い街の中で、二日で四人も、だからなあ」

「しかも　全員同級生。高丸中よりも、隣の草上中の方が多いけどな　」

「一体どうなってるんだよ　」

そう。偶然にも敬子が無差別に殺した三人は、彼等と同じ中学生なのだ。

「それに　俊も含めて二人も失踪　くそ！ありえねえよ！」

夕暮れの光が井蛹川を綺麗なオレンジに染めていた。

そこで四人の少年達は無数の謎に悩まされていた。

第5話：絡み合っていた謎（後書き）

今まで読んでいただき、ありがとうございました！

さて、この矛盾に満ちた物語、僕の文章の稚拙さもあって、読みにくいところも多々あったでしょうが、本当にこのままでは意味がわかりませんよね。実はこの物語で起きていることは、全て論理的な説明がつくのです。『何故俊人が生きていたのか』が最も大きな謎ですが、それらは全て次回作、『僕等は井蛹川にて』留心編』で明かしていききたいと思います。
では、長々と失礼致しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2299b/>

僕等は井蛹川にて～移心編～

2010年11月23日07時48分発行